

宗教の合理的な理解とは？

川又俊則・寺田喜朗・武井順介編『ライフヒストリーの宗教社会学』ハーベスト社 より、

第2章 信者はいかにして宗教を選択するのか (武井順介)

アプローチの特徴：宗教研究に「合理的選択理論」を導入。

→ 宗教行動（ここでは宗教選択）を経済活動として捉える。

その理由：一般社会から「わからない」論理で動いているとされがちな宗教現象を、理解可能な形で呈示するため。

「合理的選択理論」による宗教研究

教団を「宗教企業」、入信者を「消費者」と捉え、両者の間に経済的交換関係を想定する。

→ 多様な宗教が（世俗のものとも）競合している現代の状況にあって、宗教と信者の関係を解明するひとつの方途としては、興味深かった。

宗教が「選択されるもの」になったという状況の反映と言えるだろう。

ところが、筆者は宗教現象を「理解」するために合理的選択理論を導入しようとしている。

→ はたして、宗教の「わからない」「奇異な」ところが、この理論で「わかる」ようになるのかどうか。

本章で取り上げられているのは、宗教が「選択」される過程。

それがコストベネフィットの計算に基づいて（目的）合理的になされているものと解釈される。

→ しかし、どこまでがそのような「合理的選択」なのだろうか。

信者は当初、浄霊によって病気を治してもらうために教会に通っていた。

教会長の H 先生：「ここは宗教だから病気を治すためだけに来るんなら来なくて良い」
(p.66.)

これを筆者は、L. R. Iannaccone に倣って「フリーライダー問題」として捉える。

修行や奉仕といった費用を払わずに商品（浄霊）だけを得ることは「ただ乗り」であり、信者数の減退につながるから止めさせたいのだ、という解釈。

→ たんに「修行や奉仕活動といった費用を払いなさい」と言っているのか。

例えば「病気の治療」という「目的」のための「手段」として修行や奉仕活動をおこなう人は、「信者」として認められるのだろうか。

現に信者は当初、半信半疑であり、真偽を確かめるために「観察」するつもりで入会。

→ この時点では「信仰」とは言えないだろう。

そこから後は、さまざまな「奇蹟」を見せられて「絶対的信仰心」に至るプロセス。

→ はたして、このプロセスのなかで信者が「絶対的信仰心」をもつことを「合理的に選択」したと言えるのだろうか。

そもそも「信じる」ことは、コストベネフィットの計算に基づく「選択」と相容れるものであろうか（「信じた方が得だから信じる」のを「絶対的信仰心」と言えるのか）。

宗教を「選択」できる段階、すなわち絶対的信仰心を抱く以前の、世俗的世界の内にとどまっている段階のみに、合理的選択理論が適用されたにすぎない。

人びとが「宗教は『わからない』」というとき、「わからない」のは主にその先なのではないか。

→ つまり、読者は「わからない」ものを「理解できた」のではなく、元々わかりうる部分だけを納得したにすぎないのではないか。